

第17回多言語組版研究会「DITAの基礎」資料

DITAの紹介と利用について

効率的な文書管理と多言語への応用

2005年9月12日

アンテナハウス株式会社
XSL製品グループ 真弓 智子

DITAとは？

- Darwin Information Typing Architecture の略
- XMLベースの技術文書の生成および管理仕様
- 2005年5月3日にOASIS標準として承認
- 情報の分散化と再利用がテーマ
- 大規模なマニュアル等のドキュメント管理に適している

OASIS承認までの流れ

- 元々はIBM社がポストSGML社内電子文書として開発したもの
- 2004年春からDITA推進計画のもと、OASIS DITA技術委員会がその仕様を定義
 - DITA推進委員会メンバーはArbortext, Innodata, Isogen, IBM, フィンランドNokia, など
- 2005年5月3日にOASIS標準として承認
<http://www.oasis-open.org/committees/download.php/12091/cd2.zip>

DITAの構造

- topicとmapという基本ユニット
- topicは分割された情報の単位
- mapはtopicを管理し、文書構成を定義する

topic

- 情報の単位 = topic
- topicはスタンドアロンで再利用可能な情報
- topicはタイプを持っている
- concept、task、referenceの3つのタイプ
- タイプを特殊化することで容易に拡張できる
- HTMLやDocBookと共用可能な要素定義
 - メタデータやCALIS Tableなど

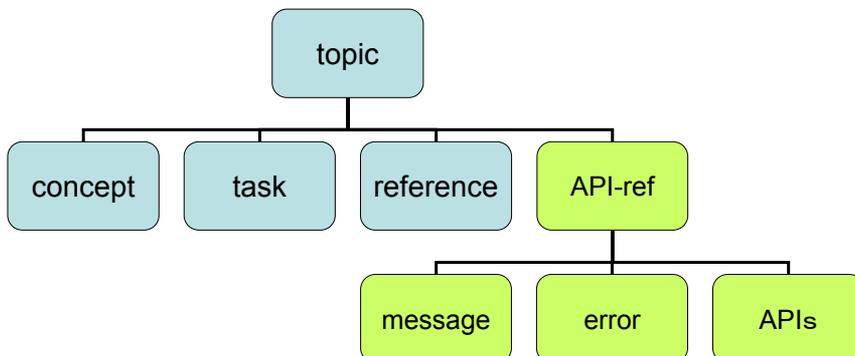
map

- 複数のtopicの中から、必要なものを選択し、まとめる役割を持つ
- 配布対象によっていくつも作ることができる
- 実際のmapファイルの中は、topicのファイルのURLをtopicref要素で列挙したシンプルなもの
- topicref要素をネストさせることでtopicを階層化させることもできる

タイプの特殊化による拡張性

- topic、concept、task、reference以外に、必要な機能(要素)を追加して派生させたトピックタイプを使うことができる
- 特殊化することで、既存のトピックタイプは影響を受けることなく拡張できる
- class属性を使ったレベル定義

タイプの特殊化の例



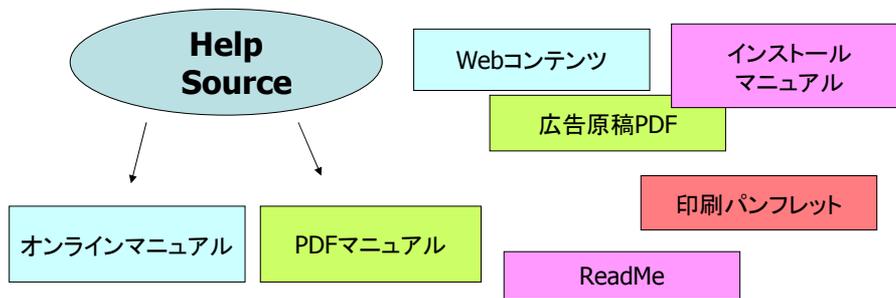
分散化と再利用

- 製品に付随する情報を分散化し、内容の重複を防ぐことにより、オーサリングの効率化を図る
- 既存のコンテンツの有効利用
- 出力媒体や性質の異なるドキュメントであっても共通する情報は集中管理できる

ドキュメントの管理

- 製品に付随する様々なドキュメントとは？
 - オンラインマニュアル
 - PDFマニュアル
 - ReadMe
 - インストールマニュアル
 - Webコンテンツ
 - 雑誌広告原稿
 - 印刷パンフレット
 - 技術者向けメンテナンスマニュアル.....etc
- このように内容や形式の異なる配布物が多く存在する

例:XSL Formatterのドキュメントの現状と問題点



- マニュアル2種はOne Sourceでスタイルシートによる自動生成、他のドキュメントは別々で作成、管理
- それぞれ、日本語版/英語版が存在する

ここから考えられる問題点とは？

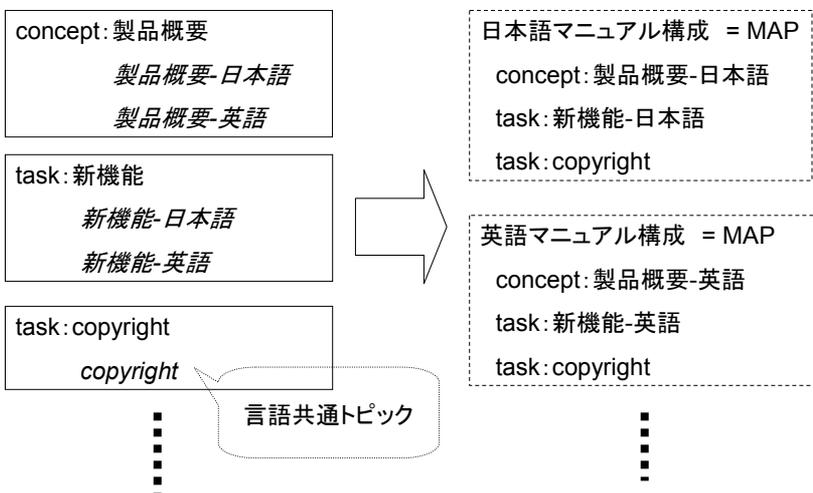
問題点

- 内容が配布物によって一致しない
- 個々に修正するのでミスが発生しやすい
- 作業の重複
- システムの自動化が困難
- 同じ内容でも著者(翻訳者)によっては言い回しが異なる
- データの有効利用がされていない

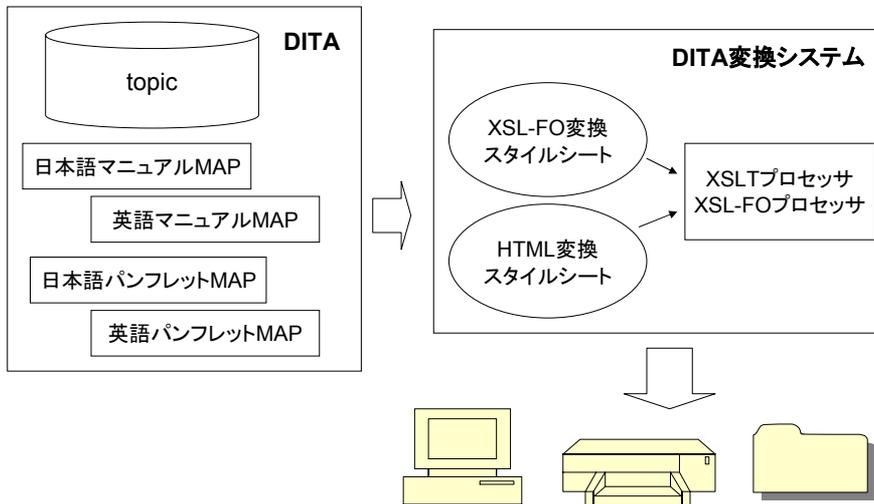
DITAの利点は？

- 大規模なマニュアルを最小限のコンテンツで管理
- タイプを特殊化して利用することができる
- 全体での完全性を保証

多言語組版とDITA -1-



多言語組版とDITA -2-



DITAをオーサリングするには？

- Altova XMLSpy2005
- VEX
- HTML→DITA変換(IBM提供スタイルシート)
- DITA—FrameMaker

DITAを表示・印刷するには？

- DITA Open ToolKit 1.1
<http://sourceforge.net/projects/dita-ot/>
- Antenna House DITAtoFOスタイルシート